

産婦人科

DOHaD ってご存知ですか

産婦人科 川上 剛史
Takeshi Kawakami

皆様DOHaDという言葉をご存知でしょうか？

DOHaDとはDevelopmental Origins of Health and Diseaseの頭文字からとったもので、「将来の健康や特定の病気へのかかりやすさは、胎児期や生後早期の環境の影響を強く受けて決定される」という概念です。これは1986年にイギリスのBarkerらによって低出生体重児（2500g未満）が成人に達した後に冠動脈疾患での死亡率が多かったという疫学調査を発端に胎児期の栄養不良が成人病の素因を作るとする「胎児プログラミング説」、いわゆるBarker仮説（成人病胎児期起源仮説）を提唱することに始まります。当初は認知されなかった学説でしたが、その後世界大戦などの特殊な状況（ナチス占領下のオランダ西武地域に食料禁輸措置がとられた事件。禁輸措置以前は平均2000-2500kcal/日摂取していた成人（妊婦も含め）に対して700kcal/日未満の栄養状態にさらされた・等）における疫学調査がおこなわれ、食料配給のデータが正確に残っていることなどから妊娠初期、中期、後期の低栄養状態が児にいかなる疾病を発症するかが正確に分析され、非常に痛ましい歴史上の事件ですが、この結果もBarker仮説を支持するものになっています。

今日ではあらゆる非感染性疾患（non-communicable disease；不健康な食事や運動不足、喫煙、過度の飲酒などの原因が共通しており、生活習慣の改善により予防可能な疾患として位置づけられてい

る疾患群。狭義ではがん・糖尿病・循環器疾患・呼吸器疾患が含まれる）の発症リスクが胎児期～小児期の栄養やストレスなどの環境と密接に関連している（プログラムされている）という考え方に至っています。

非感染性疾患は生活習慣病ですので、この周産期から新生児期における影響のみで全てが決定されるわけではありませんが、我々自身も含め、やはり出産（周産期）というものはヒトの人生に大きな影響を与える因子であることが伺えます。

今後は少子高齢化が一層顕著になり、生活習慣病への対策は急務と言えます。現在の予防医学はある程度の異常がはっきりした後に介入が始まる訳ですが、DOHaDの概念がより解明され、臨床に応用されるようなものになれば生活習慣病への対策の柱になるのかもしれない。

将来を担うお子さんたちの人生がより健康であるために産科は努力をしていきたいと思っています。

